

九州大学

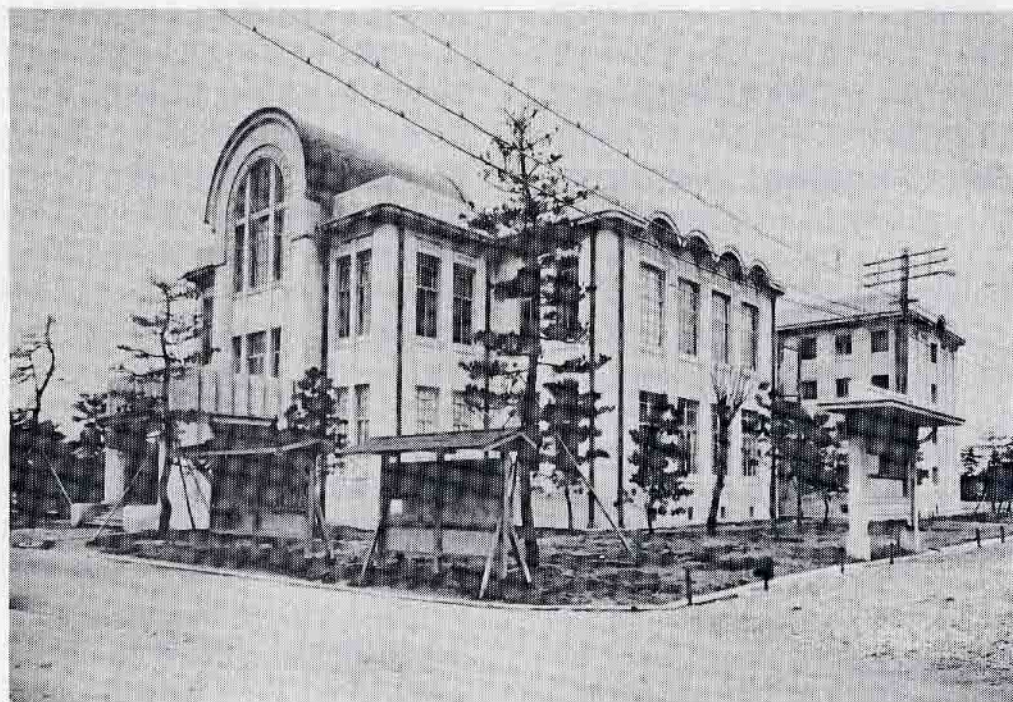
大学史料室ニュース

第5号

1995. 3. 10.

目 次

九州大学の『源氏物語』書	2
史料紹介(5)	4
沿革史紹介(4)	6
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿 ..	6
受贈図書一覧	7
大学史料室日誌抄録	8



竣工まもない附属図書館

本学の附属図書館は、1922年(大正11)5月、勅令第290号により、初めて官制上の設置をみた。しかし、図書館独自の建物はなく、本館が竣工したのは、3年後の1925年(大正14)6月のことであった。附属図書館は法文学部と時を同じくして建築されるが、これは両者の関係が密接だったからである。本館は鉄筋コンクリート2階建延327坪、書庫は鉄筋コンクリート4階建延408坪で、設立当時の蔵書数は約3,500冊。上の写真は、竣工まもない図書館本館であるが、同建物は、現在でも工学部本館の西隣りに見ることができる。1972年(昭和47)、新図書館(中央図書館)が竣工すると、保存図書館(旧図書館)となり、最近では工学部食堂、工学部中央図書室、印刷所等として利用されている。

九州大学の『源氏物語』書

今 西 祐 一 郎

九州大学の和本（明治以前にわが国で書写、出版された本）は、その量においては当然、そして質もその平均的な高さという点では、おそらく九州随一といってよいであろう。もちろん国会図書館、内閣文庫（国立公文書館）、宮内庁書陵部といった超一流の文庫、図書館には及ばないが、日本全国の和本の所在を記す『国書総目録』を繙けば、かなりの数の「九大」という記載を容易に見出すことができるのである。

これら貴重な和書は、大正13年の法文学部創設、同14年の附属図書館の完成以来、歴代の教官、図書館職員によってたゆみなく行われてきた集書のたまものであるが、とりわけ九州大学の蔵書を質量ともに充実させたのは、折にふれあるいは寄贈され、あるいは一括購入された大型コレクションである。

古くは、福岡藩士の家に生まれ、わが国近代天文学の先駆者として初代東京天文台長を務めた寺尾壽氏（大正12年没）の音無文庫、佐渡生まれの国史、国文学者で明治大正時代に多くの著述を残した、東京帝国大学教授萩野由之（大正13年没）

旧蔵の萩野文庫、近くは本学教養部教授であった田村専一郎氏（昭和50年没）の支子（くちなし）文庫などで、いずれも今となっては年間の講座費を全額投じて購入できないような書物を多数擁した宝の山である。

限られた紙面でその豊かな全貌を紹介することは不可能ゆえ、今回は筆者の専攻する『源氏物語』関係の書物から興味深い2点を取りあげ紹介する。

その前に九州大学蔵の『源氏物語』関連書目の概要を述べておこう。九州大学蔵の『源氏』関連の書目は80点ちかくにのぼり、そのほとんどは昨年5月、附属図書館の貴重文物展観に「源氏物語の本」と題して展示したが、残念なのはその中に鎌倉、室町時代の書写にかかる『源氏物語』の古写本が含まれていない点である。本学に蔵されるめばしい54帖揃いの『源氏物語』は、文学部蔵の古活字版（これは版本としては貴重な本である。「九大学報」平成6年2月号参照）および近世中期写本の2点くらいか。他に支子文庫に近世初期にさかのぼる、紹巴本校合の写本（横本）があるが、惜むらくは54帖中29帖しか残っていない。この現状は、島津家ゆかりの鎌倉時代の古写本十数帖を有する鹿児島大学玉里文庫や細川幽斎自筆の54帖をはじめ多数の室町時代末期～江戸初期の典籍を収める熊本大学永青文庫に較べて、かなり見劣りがするといわなければならない。

しかし中世以来の源氏学の成果である『源氏物語』の注釈書類に目を転じると、『源氏奥入』、『河海抄』、『花鳥余情』、『弄花抄』、『細流抄』、『紹巴抄』（整板本）、『万水一露抄』、『覚性（正しくは「勝」）院抄』と、主要なものをほぼ網羅して立派である。

ここ十数年来、『源氏物語』研究はたんに『源氏物語』本体の研究にとどまらず、これら中世以来の注釈書も研究の重要な領域となり、個々の注釈書の影印本、翻字本の刊行が相次いで、特定の図書館、文庫でそれらの写本、板本を閲覧せずとも容易に利用できるようになった。だが、それ以前に上に挙げたような古注釈書が、これだけ揃っていたというのは、さすがに旧帝大の面目といべきか。

もっとも研究の進展により、影印本や翻字本が続々と出版されれば、もはや本学蔵のそれらの現



図1 穂久邇文庫本『覚勝院抄』



図2 九大文学部蔵『覚性院抄』

物はあまり必要とされなくなるのではないか——
こういう疑問が生じるかもしれない。しかしそれは浅慮というもの。なぜならば、写本というものは同一の書でも、書写時のさまざまな状況に左右されて、どれ一つとして全く同じ本は存在しない（板本も重板、改板等によって異種板が生じる）からである。

むしろ、他の文庫、図書館の貴重な書物が影印されると、それとの比較を通して、これまで「燈台もと暗し」で精査を怠ってきた九大本の価値や特徴がおのずから知られて、興味は尽きない。

*

その一例として、文学部蔵『覚性（正しくは「勝」）院抄』（内題『源氏物語聞書』）を挙げよう。これは著（編）者とおぼしき「覚勝院」なる人物の輪郭が未詳のゆえもあって、従来ほとんど取りあげられることのなかった注釈書であるが、25冊約2,500丁（5,000頁）に及ぶ大冊である。今日10本余知られるこの『覚勝院抄』中、最善本でかつ著（編）者自筆本ではないかと推定される穂久邇文庫本の影印が、平成元年から3年にかけて刊行された（東京・汲古書院）。

過日、その影印本（図1）と文学部蔵本（図2）とを見較べてびっくりした。九大本は穂久邇文庫本と一面の行数、各行の字詰め、そして驚くべきことに、おびたしい朱、青、墨の書き入れの内容、位置にいたるまでが、寸分違わず一致しているではないか。しかも穂久邇本のいかにも著（編）者自筆本らしい奔放な朱、青での沫消、書き換えの跡は九大本ではきれいに整理されて、まことに端正な写しである。

前記影印本の解説によれば、穂久邇文庫本の臨写かと思われる国会図書館蔵の『覚勝院抄』が紹介されている。けれども同解説付載の写真で見ると、九大本の方が丁寧な字、そして各行の字詰めもより多く穂久邇本に一致しているように見受けられる。おそらく九大本は、現存『覚勝院抄』伝本中、もっとも美しい写本ではないだろうか。

このような5,000頁を超え、しかも『源氏物語』の注釈書としても必ずしも一般的ではない大部の書物が、どのような経緯で書写されたのか、できることなら一度探索を試みたく思う。

*

同じような感慨を抱かせる『源氏物語』の注釈書がもう1点ある。鎌倉時代以来の源氏学の学説を集成して室町時代の末に編まれた『万水一露抄』54巻54冊である。

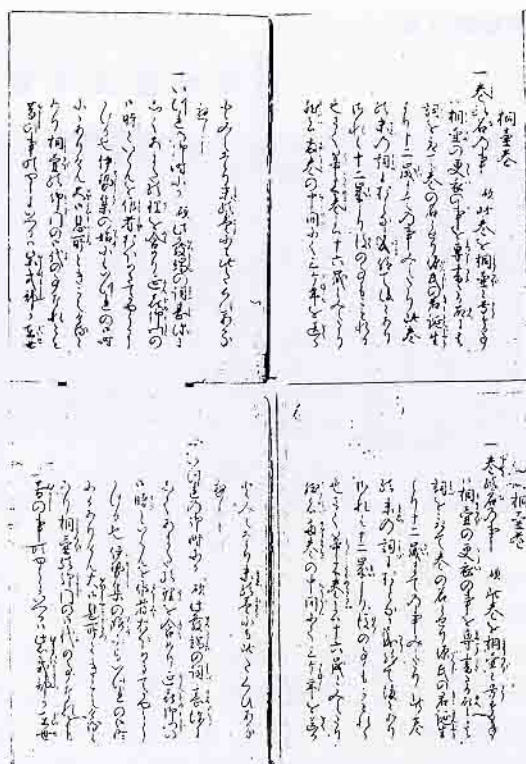


図3 河野記念館本『万水一露抄』

図4 九大・音無文庫本『万水一露抄』

昨年度半年間、併任教官に任じられていた東京の国文学研究資料館で、同館収集の紙焼き写真の『源氏物語』注釈書をあれこれ眺めていた時のこと。四国は今治市の河野信一記念館蔵で善本として定評のある『万水一露抄』の写真版を見て、おやっと思った。以前から何度か手にとり、部分的には複写もして座右に備えている、九大、音無文庫の『万水一露抄』によく似ているのである。

気になったので河野信一記念館本の桐壺巻の複写（図3）を求め、帰福の後、音無文庫本（図4）と突き合わせてみると、はたしてピッタリと符合する。一面の行数はもとより、各行の字詰め、個々の変体仮名の字母（仮名のもとになった漢字）、漢字に付された振り仮名まで、寸分違わず同一なのであった。この同一が、54巻54冊全体にわたるものか否かは未確認であるが、その可能性は大いに期待できる。

もしそうだとすれば、これは大変なことだ。九大蔵『万水一露抄』（従って河野本も）の紙数は5,000丁（1万頁）余。このような途方もない大部の書物に、寸分違わぬ写本が2部存在するとはどういうことか、という新たな謎が浮かび上がってくるからである。

この謎解きも、また今後の課題である。

（九州大学文学部助教授）

九州帝国大学職員録・九州大学職員録

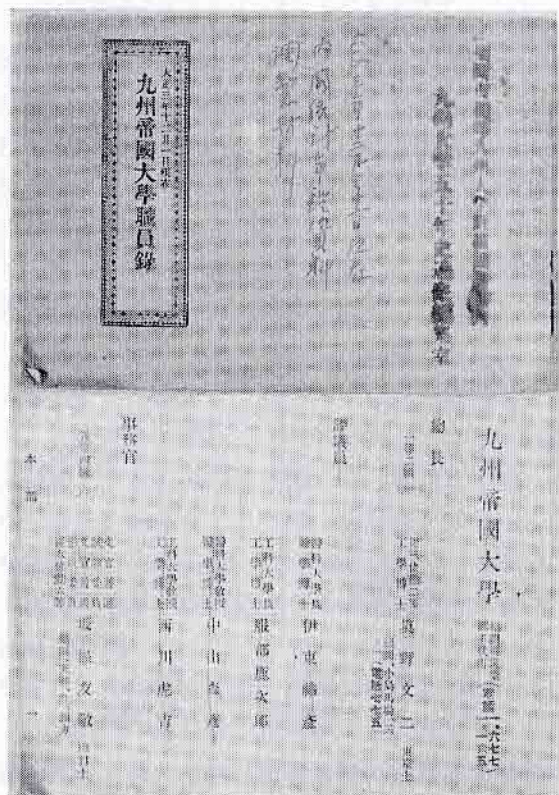


写真 1 (表紙・1頁)

わが国の大学で、現在、自らの職員録(住所録)を刊行していない大学は皆無と思われる。九大においても毎年1回、職員録を刊行しているが、これは学内の諸事務連絡用に利用されるだけでなく、大学のありようを学外に公開する一種の資料であると同時に、古い職員録は大学の歴史を調査・研究するときの歴史史料でもある。九大大学史料室には、欠号があるとはいえ、1914年(大正3)～1994年(平成6)の職員録が所蔵されており、それには他の記録では知られない多くの情報が含まれている。

旧帝大系の大学において、このように古い職員録が残されている例は珍しく、いまのところ、帝国大学時代の職員録は、東北大学に1934年(昭和9)以降の『東北帝国大学職員住所録』が残されているぐらいで、東京、京都両大学には戦前期の職員録(住所録)は知られていない。今回は、わが国の帝大史料の中でも貴重な事例になると思われる、九大職員録の紹介を行ってみたい。

九州大学で現存最古の職員録は、1914年(大正3)12月23日発行の『九州帝国大学職員録』(写真1)である。ただし、これが本学で最初に刊行

された職員録であったかどうかは、明確な史料がなく判然としない。大きさはB7版、縦書き、58頁。発行は九州帝国大学庶務課、印刷所は福岡市福岡橋口町の英文舎であった。内容は「本部」「医科大学」「附属医院」「工科大学」の4部に大別され、それぞれ「本部」には総長、評議員、事務官、学生監、技師、庶務課以下の課と監督等の嘱託、名誉教授。「医科大学」には長、教授、助教授、講師、助手、副手、書記、雇等。「附属医院」には長、書記、雇、薬局長、薬剤手等のほか、看護員養成科、産婆養成科。「工科大学」には医科大学同様、長、教授～雇までの人員が記されている。

官職、担当講座、氏名、住所、電話番号(自宅)は、現在の職員録と同じであるが、現行のものと異なるのは、第一に氏名の上に「一等二級」といった高等官官等・級と、「従三位勲二等工学博士」といった高等官勲等・位階、学位が記され、氏名の下に「東京士」のような出身地と族籍が記されていること。第二に収録の範囲が、本学職員録のひな型となったと思われる当時の『文部省職員録』よりも広く、事務系・技術系職員として大学の業務を実質的に担った「雇」や、同じく研究面で分科大学を支えた「副手」にまで及んでいること。第三に高等官官等俸給令、判任官俸給令により規定されていた高等官や判任官以外の職員＝書記、雇、副手、講師といった職員の「月手当」や「年手当」が記されていることであり、当時の大学制度の実態をより明確に知ることができる。特に最初にあげた官等、勲位、族籍を記すという点は、前述の『東北帝国大学職員住所録』が、住所、官職、氏名のための記載であるのに対して、『九州帝国大学職員録』の大きな特徴となっている。

この形の職員録は、大正中期以降、氏名の出身地・族籍が未記載となったこと(1918年頃)、巻末に高等官、判任官の「俸給表」が付けられるようになったこと(1924年頃)、新たに建築委員会等の学内委員会が所載されるようになり(1920年)、印刷所が学外の民間会社から学内の「印刷所」に変わったこと(1924年頃)、配属将校室の記載が始まったこと(1935年)ぐらいで、基本的には大きな変更もなく、大学の拡充にともなって頁数を増やしながら、戦前期を通じて毎年刊行された。刊行月日は年末の12月か11月であり、発行部数は昭和

6年の史料によれば650部であった。

戦前期で最もその頁数が多くなったのは、戦争末期の1944年（昭和19）のもので（実際の刊行は終戦の年の1945年5月）、全520頁。掲載事項は庶務課以下の事務組織のほかに、軍事教官室、学生診療所、附属図書館、附属天草臨海実験所、附属彦山生物學研究所といった附属施設、それに各種委員会、名誉教授という構成からなる「本部」と、附属施設を有する「医学部」「工学部」「農学部」「法文学部」「理学部」の各学部、戦中期に国策により新設された「附属医学専門部」「附属工業専門部」「流体工学研究所」「弾性工学研究所」「木材研究所」「福岡臨時教員養成所」等の専門部、研究所からなっており、そこには延3,355名の九大関係教職員が収録されている。

終戦後の職員録の刊行は、物資不足のため、なかなか行われなかったが、1949年（昭和24）10月になって、『九州大学職員録』（縦書き2段組、171頁）が刊行された。発行、印刷所は、戦前同様、それぞれ九州大学庶務課、九州大学印刷所。このとき、判形がB6版に改められたが、形式的には、本部、医学部、工学部、農学部以下の各学部、附属図書館、各研究所の順で掲載され、雇、副手、医員等も収録されるなど、戦前のものをほぼ踏襲していた。ただし、戦前期に存在した勲位は消失し、逆に委員会の中に終戦直後に設置された「教員適格審査委員会」が入れられ、また1946年（昭和21）4月の帝国大学官制によって規定された「文部教官三級」が記載されるなど、新たな変化も現れた。

しかし、この職員録は、翌50年には刊行されなかったようで、翌々年の1951年（昭和26）10月には、B5版、ガリ版刷りの「職員録」（縦書き2段組、41頁）が作られた。おそらくは、経費節約のために取られた措置であったと思われる。総長、評議員、事務局、学生部、附属図書館、文学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、附属病院、工学部、農学部、医学専門部、分校、温泉治療学研究所、応用力学研究所、生産科学研究所、産業労働研究所の順に掲載がなされ、部局の収録順が初めて、現行の職員録とほぼ同様になった。それまでは部局（学部）の設置順で行われていたから、形式的には大きな変更といえる。これは1949年（昭和24）5月に公布された国立学校設置法の順番に従った結果であろう。この職員録には教官の担当講座名が無く、また人名の記載方法も官職ごとに一括して記載されるなど、従来のものと比べて簡略なものとなっている。

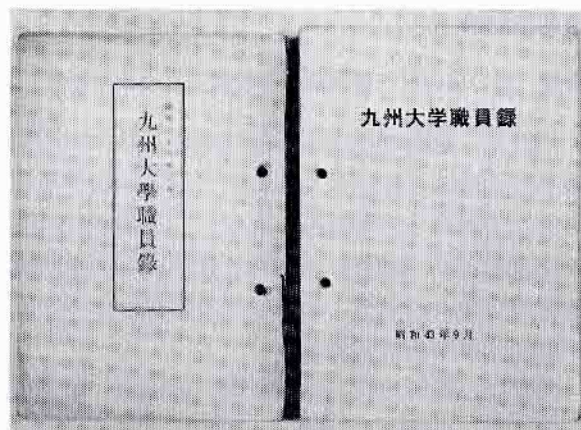


写真 2

ついで印刷事情が好転した昭和20年代の後半には、写真2（左）のような『九州大学職員録』が刊行された（1953年8月）。B6版、縦書き3段組（一部2段組）で全182頁。この職員録において戦前以来の名誉教授、各種委員会、氏名の学科・教室ごとの記載が復活したが、中でも大きな変化は、附属病院に「看護員」の項が作られ、従来の看護長のみ記載から一般の看護婦の氏名も収録されるようになったことである。この形の職員録は、1956年（昭和31）索引が付せられ、1960年（昭和35）まで刊行が続けられたが、1961年（昭和36）には、学内電話の番号が記載されるようになるとともに、それまでの縦3段組を2段組とする改版が行われた。各学部の非常勤講師の記載が始まったのもこの時代のことで（1965年）、大学における教育・研究活動の多様な側面をより具体的に知ることができる。

しかし、この形式の職員録も、1968年（昭和43）には、縦書きから横書きに大きく改編された（写真2（右））。総長、評議員、名誉教授、事務局、附属図書館、文学部以下の学部、教養部、研究所の順に、学科ごとに、教授以下の講座、氏名、学内電話、住所、氏名を記すという形は、現行の職員録と全く同一である。発行・印刷がこれまでの庶務課・学内印刷所から人事課・学外の印刷会社となり（各々1979年・1975年）、巻末の委員会名簿が廃止されて、学内FAX電話番号一覧が入れられ（1990年）、大正期以来の附属病院「医員」の掲載が廃止（1991年）になるなどの変更があったが、この形式の職員録は、1968年（昭和43）～1992年（平成4）までの25年間に渡って刊行が続けられた。1993年（平成5）、行政文書のA版化でA4版と大きくなったが、形式的には大きな変化は見られない。（〇）

沿革史紹介 (4)

青陵 思い出の記—福岡高等学校創立五十周年記念

1921年に設置され、1946年に廃止された旧制福岡高等学校は、1971年でちょうど創立50周年を迎えた。本書はこの50周年を記念して編集されたもので、A5版、縦書き、533頁。福岡高等学校同窓会青陵会の手により、1972年11月に発行された。印刷は九電産業株式会社。

内容は、恩師の思い出、恩師への追慕、同窓生の思い出、青陵会の記録の4編からなる。1969年に沿革史を含む『あゝ玄海の浪の華』が出されていたことや、正史ではなくエピソードの積み上げによる裏面史を編むという編集方針により、全編、旧教官・同窓生等の思い出の記(投稿)で構成されている。旧教官による思い出33編をはじめ、同窓生の思い出95編等、全179編が所収されており、旧制福岡高等学校の多彩な側面が、創設から戦前、戦中、戦後にかけて、生きいきと描かれている。最後の「青陵会の記録」には、青陵会の由来のほか、学而寮の献立表や専門家による献立カロリーの試算等も載せられ、旧制高等学校生活史の貴重な記録となっている。

10年のあゆみ —九州大学大型計算機センター

「大型計算機センター広報」の特別号として、1981年2月に刊行された。A5版。横書き。400頁。

大型計算機センターは、1969年1月に開所することになっていたが、1968年6月、建築中のセンター建物に米軍戦闘機が墜落炎上し、正式の設置が70年4月に延期された。

本書は同センター設置の前史から、創立10周年記念式典が挙行された1979年6月までの事柄を記しており、第1部センターの設置まで(昭和45年4月まで)、第2部センター正式設置から現在まで(昭和45年4月から54年3月まで)、第3部センター10年の記録の、3部からなる。

第1部には、期せずして九大紛争の舞台とされた大型計算機センターの正式設置までの経緯が詳述されている。第2部では、センターで稼働した計算機についての説明等がなされ、現在では学術史上の貴重な資料となっている。第3部には、センター10年の記録が、事務部の変遷、各種統計や年表、センター関係諸規定等にまとめられて所収されている。

九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

委員長 ○比 文 研 教 授 有馬 学
副委員長 ○農 学 部 教 授 深尾 清造
副委員長 ○石 炭 研 教 授 東定 宣昌
文 学 部 助教授 佐伯 弘次
○教育学部 助教授 新谷 恭明
○法 学 部 教 授 植田 信廣
○経済学部 教 授 荻野 喜弘
○理 学 部 教 授 柳田 壽一
○医 学 部 教 授 多田 功
歯 学 部 教 授 坂井 英隆
薬 学 部 教 授 前田 稔
工 学 部 教 授 前川 道郎
数 理 研 助教授 川崎 英文
総 理 工 教 授 本地 弘之
生 医 研 教 授 木村 元喜
応 研 教 授 高橋 清
機 能 研 教 授 西村 幸雄
健 セ 助教授 堀田 昇
言 文 助教授 金子 暢良

医 短 教 授 吉本 清一
医 病 教 授 野瀬 善明
歯 病 教 授 池本 清海
生 環 研 助教授 北野 雅治
熱 研 助教授 林 静夫
情 セ 助教授 古川 善吾
アイセ 教 授 大崎 進
中央分析 助教授 坂下 寛文
遺伝情報 教 授 服巻 保幸
留 セ 助教授 岡崎 智己
有 化 研 助教授 菊池 純一
大 教 セ 助教授 小山 紘三
先 端 セ 助教授 中島 寛
大 型 助教授 天野 浩文
図書館長 村上 幸人
学生部長 西村 重雄
事務局長 澤川 俊明

○は専門委員会委員
(1994年12月1日現在)

受 贈 図 書 一 覧 (1994年 7 月～12月)

サティア《あるがまま》 第15号		石下町地域交流センター	1994.10
東洋大学井上円了記念学術センター	1994. 7	藤沢市史新聞記事目録《横浜貿易新報・明治編》	
九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区		藤沢市文書館	1993. 8
遺跡群— 第 3 冊		久留米高専三十年誌	
九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室	1994. 3	久留米工業高等専門学校	1994.10
福岡高等学校同窓会会報 第16号		旭川医科大学二十年の軌跡	
福岡高等学校同窓会	1940. 6	旭川医科大学開学20周年記念行事实行委員会	1994.10
校友会雑誌 第15号			
福岡高等学校々友会	1930.10	読売新聞百二十年史	
校友会雑誌 創立十周年記念号		読売新聞社	1994.11
福岡高等学校々友会	1931.12	関西大学百年史 年表・索引編	
白鵬 旧制福岡高等学校排球部五十年史		関西大学	1994. 8
旧制福岡排球部五十周年記念事業会	1980.10	研究報告 第67号—近代化過程における遠隔教育	
若草匂ふ 卒業四十五周年記念誌		の初期的形態に関する研究—	
福岡高等学校理科乙類廿三回生同窓会		放送教育開発センター	1994. 3
同窓会名簿		福岡県公共図書館郷土資料総合目録 追録 6	
九州大学文学部同窓会	1994. 7	福岡県立図書館・福岡県公共図書館等協議会	1994.11
どくたあNOW 福岡の医療事情			
東洋図書出版	1990.11	桃山学院年史紀要 第14号(学院創立110周年記念	
地域交流センター概要		号)	
石下町地域交流センター	1992.10	桃山学院年史委員会	1994.11
日本の学校建築		北浦町史 史料編第1巻 町内文書	
文教ニュース社	1983. 7	北浦町	1994. 3
日本の学校建築—資料編—		東京大学史紀要 第11号	
文教ニュース社	1983. 7	東京大学史史料室	1993. 3
不知火の記		東京大学史史料室ニュース 第2、10、13号	
秋山六郎兵衛 白水社	1968. 1	東京大学史史料室	1988.11、1993.3、1994.11
青陵 思い出の記		大学アーカイヴス No.11	
福岡高等学校同窓会 青陵会	1972.11	東日本大学史連絡協議会	1994.12
あ、玄海の浪の華 旧制高等学校物語(福岡高校		福岡県地域史研究所 県史だより 第1号～第75号	
編)		西日本文化協会	1981.9～1994. 9
財界評論新社	1969. 6	久留米高専三十年誌	
松の実 第29号		久留米工業高等専門学校	1994.10
九州大学女子卒業生の会	1994. 9	中京大学創立40周年記念誌 知のフロンティア	
広島県立文書館紀要 第3号		中京大学	1994.10
広島県立文書館	1994. 7	佐賀大学四十年史	
広島県立文書館だより 第4号		第一法規出版株式会社	1994.10
広島県立文書館	1994. 8	宮崎医科大学開学二十年史	
収蔵文書展 江戸の旅人たち		宮崎医科大学	1994.10
広島県立文書館	1994.10	九州大学女子卒業生の会名簿	
神奈川県立金沢文庫総合案内		九州大学女子卒業生の会(松の実会)	1994.10
神奈川県立金沢文庫	1991. 3	東海大学福岡短期大学教育研究年報 情報処理学	
専修大学115		科・国際文化学科	
専修大学	1994. 8	東海大学福岡短期大学	1994.12
第1回特別企画展図録 長塚節と友人たち			

かわら版 第99号

近代日本教育史料研究会 1994.12
文部行政のすべて 1990年度版
教育行政資料調査センター 1990. 4
大学病院年報 3年間のあゆみ
産業医科大学病院 1983. 5
広島大学総合科学部20年史
広島大学総合科学部 1994. 6

東京大学総合研究資料館要覧 創立10周年記念
東京大学総合研究資料館 1976.11
収蔵資料目録Ⅰ 考古資料—1 保存処理木製品
向日市文化資料館 1994. 3
向日市文化資料館報 第9号
向日市文化資料館 1994. 3
開館10周年記念特別展 山背から山城へ
向日市文化資料館 1994. 9

大学史料室日誌抄録 (1994年7月～12月)

7.11 (月) 予算経理委員会。	10.12 (水) 折田講師、平成6年度九州大学中堅職員研修において「九州大学の歴史」講義。
7.14 (木) 第11回運営委員会。	10.13 (木) 第13回運営委員会。
7.19 (火) 理学部岡崎篤教授より史料寄贈。	10.14 (金) 京都大学百年史編集史料室員1名来室。
7.26 (火) 評議会(大学史料室予算決定)。	10.19 (水) 折田講師、第20回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会に参加(～21日。於横浜市開港記念会館)。
8.12 (金) 庶務課より史料受領。	10.24 (月) 法学部図書掛より史料受領。
8.16 (火) 第12回運営委員会。	10.28 (金) 大学史料室北側階段改修工事(～11.4)。
8.23 (火) 石炭研究資料センターより史料(図書)受領。	11. 7 (月) 平成7年度科学研究費研究計画書(一般研究(B))提出。
9. 1 (木) 中野三敏前文学部長より史料寄贈。	11.11 (金) 庶務課法規掛より史料受領。
9. 2 (金) 毛利浄賢元教養部教授より史料(図書)寄贈。	11.15 (火) 「大学史料室への印刷物の送付について(依頼)」発送。
9.20 (火) 『大学史料室ニュース』第4号刊行。	11.29 (火) 旧教養部関係公印受託。
9.29 (木) 旧教養部、附属図書館教養部分館看板受け入れ。	12.15 (木) 第10回専門委員会。
10. 5 (水) 『大学史料叢書』第3輯発注。 折田講師、東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会合同研究部会参加(～6日。於西南学院大学・福岡ガーデンパレス)。	12.21 (水) 庶務課秘書掛より史料受領。
10. 6 (木) 東京大学史史料室員1名、名古屋大学史編集室員2名来室。	12.27 (火) 谷口宏名誉教授より史料寄贈。

九州大学大学史料室ニュース 第5号

発行日 1995年3月10日(年2回刊)

編集
発行

九州大学大学史料室
福岡市東区箱崎6-10-1
電話(092)641-1101 内線2298

Archives of Kyushu University

印刷

九州大学印刷所